

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第4号 花き

発行日 平成23年6月29日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4435)

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- りんどう 昨年大発生したリンドウホソハマキなどの病害虫防除を徹底しましょう
- 小ぎく 白さび病、ハダニ等の病害虫防除を徹底しましょう
収穫前に次年度用の健全な母株を選抜しましょう
- 共通 梅雨に入り長雨、集中豪雨が懸念されますので大雨対策を講じましょう

1 大雨に伴う事後対策

梅雨に入り、一部地域で大雨による被害が発生しています。

- (1) 冠水した圃場ではすみやかに排水等対策を講じるようにしましょう。
- (2) 大雨や冠水により、茎が傾いたり、倒れた場合には早急に起こし、曲がりを軽減します。
- (3) 泥の付着や茎葉の折損により、病害が発生しやすくなりますので、被害茎葉を除去するとともに、泥を洗い流し防除指針に従って速やかに殺菌剤を散布します。
- (4) 茎葉が痛んだことにより生育が衰えたときは、草勢を回復させるために液肥等を施用します。

2 りんどう

(1) 生育概況

露地りんどうの生育は一部地域で若干遅れぎみですが概ね平年並みとなっています。極早生品種は7月上旬に開花する見込みです。

昨年大発生したリンドウホソハマキは成虫の発生、産卵がダラダラと続いているので、継続して防除が必要です。

(2) 圃場管理

ア ネット上げ

フラワーネットの最上段が草丈の7割程度の位置となるように、こまめに上げて茎の曲がりの発生を防ぎます。また、ネットに葉が引っ掛かり曲がることも多いので、随時圃場の見回りを行い、修正してください。

イ かん水・排水対策

前述のとおり大雨対策を講じて下さい。反対に雨が少なく乾燥気味の場合には、極度に乾燥する前に通路等にかん水します。

(3) 収穫・調製・出荷

ア 収穫

収穫は頂部の蕾が膨らみ色づいた頃が標準です。ただし、出荷先やバケットなどの輸送形態等により早めの収穫とする場合もありますので、事前に確認し仕向け先に合わせた切り前とします。

収穫は日中の高温となる時間帯をさけ、涼しい朝夕に行います。やむを得ず日中採花する場合は、収穫後直射日光に当たらないようにし、速やかに日陰に運び水揚げを行います。

株の消耗を防ぐため、必ず3本程度の茎を残し、残った茎は残花部を折り取って種子が作られることによる消耗を防ぎます。また、残花部の折り取りはアザミウマ類や、アブラムシ類の被害軽減へも効果的です。

イ 乾燥

雨天時に収穫した場合や朝露がついている場合は、扇風機や切り花乾燥機を用いて必ず乾燥させます。濡れたまま結束したり箱詰めしたりすると輸送中の蒸れなどによる品質低下の原因となります。

水を切るため逆さにして振ることは、茎が折れることに加え、花の蜜が花弁や葉などに付着して品質低下の原因となる場合があるので極力避けます。

ウ 選別

花段数、長さ、太さ、曲がりなどを基準に選別します。出荷規格を遵守し、信頼を落とさないようにします。病害虫の被害があるものは出荷しないことを基本とします。

また、暗い作業場での選別作業は病害虫痕の見落としなど品質の低下につながることで、作業者の目が疲れ作業性の低下や疲労が増大することとなります。りんどうの選別は花段数の確認等で目を酷使していますので、作業場全体と選別を行う作業台の明るさを十分確保します。

エ 調製・水揚げ

選別調製後、規格別に10本束にして水揚げを行います。

束とする10本の切り前や品質が揃うよう留意します。水揚げが長時間になると輸送中に蒸れることがあるので、極端に長い時間(24時間以上)の水揚げは控えます。

オ 箱詰め

各分会等で決められた方法で箱詰めを行います。輸送中に花束が動いて傷むことがないように確実に固定します。

(4) 病害虫防除

ア 葉枯病

これまでのところ下位葉部分に発生が見られていますが、発生は少なく推移しています。降雨により急激に増加し、中上位葉まで発生することが多いので、定期的に薬剤散布を行い、初期防除に努めます。薬剤散布は降雨前に行うことが理想ですので、気象情報を確認しながら効果的な防除をおこないます。



写真1 褐斑病

イ 褐斑病

7月下旬まで重点的な防除を継続します。早生種では収穫時期が近いので、葉の汚れに注意し、ダコニール1000+展着剤または、ストロビーフロアブルを使用します。葉枯病との同時防除とする場合はダコニール1000を選択します。

ウ アザミウマ類

蕾がふくらみ着色が始まる頃から蕾に侵入し、花弁を吸汁する被害が見られます。蕾の中にはいると薬剤がかからず、大量に増殖して被害が大きくなりますので、侵入を防ぐよう寄生前の予防に努めます。

アザミウマ類は雑草を含むあらゆる植物に寄生するので、周辺の作物の防除、雑草の処理を必ず行ってください。また、着蕾期前にシルバーの反射テープを支柱上部に張ることで、アザミウマの発生が大幅に減らすことが可能な現地事例があります。さらに、残花茎でのアザミウマの増殖を抑えるために、開花収穫後の残花茎は折り取り処分することが効果的となります。

エ ハダニ類

発生量は少なめですが、上位葉への寄生がみられますので注意して観察してください。また、高温・乾燥により発生が多くなりますので、発生密度が高くなる前に薬剤散布を行ってください。薬剤散布は散布量を十分に、葉の裏側を洗うように散布すると散布むらも無くなり効果が高まります。

なお、ダニ剤の使用においては同系薬剤の1年1回使用を基本に、抵抗性の発現を避けてください。

オ リンドウホソハマキ

昨年、大発生したことから、要注意害虫です。県中南部では5月末から成虫の発生や産卵が確認されています。県北や積雪の多い地域では県中南部よりも10日程度遅い発生となっています。発生ピークが判然とせずダラダラと発生が続いていますので防除を継続するとともに圃場をよく観察して下さい。

また、第2世代の発生が7月中～下旬に予想されますので、被害が散見される圃場では防除を徹底して下さい



写真2
ホソハマキの頂部食害



写真3
ホソハマキの茎への潜入痕

2 小ぎく

(1) 生育概況

6月に入り好天に恵まれ、生育は概ね順調です。白さび病、ハダニ類、アブラムシ、ナモグリバエの発生が確認されていますが、各地からの情報では、特に目立った発生には至っていません。

(2) 土壌水分管理

雨が少なく圃場が乾燥すると側枝の伸長不良や開花遅れの原因となるので、極度に乾燥する前に水を与えます。一方でりんどうと同様に梅雨期の長雨や夏秋期の集中豪雨に備えて下さい。

(3) 下葉取り

蕾が見える頃になったら、地際から2.5cm程度の葉を掻き落とし、通風をよくすることで、病害発生の抑制、収穫作業の効率化をはかります。

(4) 親株の選抜

次年度用苗の採穂に使用する親株は、収穫後では形質や病害感染が確認できないので、収穫が始まる前に次の点に留意して親株の選抜を行い、目印を付けておき、収穫後に親株とします。

ア 草丈が十分に伸び、草姿が優れる

イ 開花期が目的の時期に合う

ウ 病虫害（特にウイルス、ウイロイド）に侵されていない

エ 株の生育・充実状態が揃っている

なお、わい化病やキクえそ病に感染した株や、発生株周辺の感染のおそれのある株は必ず抜き捨てて圃場に残さないことが被害拡大防止の基本です。

(5) 収穫・調製

りんどうと同様に、切り前や作業時の環境に留意して収穫・調製を行います。

小ぎくでは、花卉が着色して爪立ちとなった頃が収穫適期となりますが、出荷時期や出荷先、品種によって異なる場合もあるので、仕向け先にあわせた適正な切り前を確認し、調製します。

(6) 病虫害防除

特に問題となる発生は確認されていませんが、発生前の予防、発生初期の防除を心がけてください。

ミカンキイロアザミウマ等が媒介するキクえそ病(TSWVによる)などのウイルス病が見られる

ので、アザミウマ類等の害虫防除を徹底します。圃場内外の雑草が各種害虫の増殖源となるので、雑草防除も必ず行ってください。

(7) 病害株の抜き取り

キクに発生するわい化病（キクわい化ウイルス）、キクえそ病（TSWV）に感染した株は薬剤散布などで治療ができないことから、健全株への伝染源や、母株とすることでの翌年の栽培への発病株の広がり等の原因となるため、見つけしだい抜き捨てることを徹底してください。

3 その他花き

(1) トルコギキョウ

生育に応じてかん水を控えて締まった草姿を目指します。また施設の温度、肥培等の管理を適正に行い、生育量確保を図るとともに、生育障害発生を抑制します。

(2) アルストロメリア

秋の開花を充実するためには夏期間は収穫を休み、株充実のため花蕾摘除、葉芽・枯れ茎の整理を行います。品種によって量は異なりますが、夏期は肥料・かん水が過剰にならないよう少なめに管理し、地温を下げるために、遮光や地冷を行います。

また、株養成中にオンシツコナジラミが発生することがあるので、適宜防除を行います。

(3) コリ類

抑制作型では遮光を行って地温低下を図りますが、梅雨期等日照が少ない時期はできるだけ日照を確保するよう遮光率の低いものに換えたり、遮光資材をはずしたりすることも必要です。

(4) ストック

7月下旬が無加温作型のは種期です。育苗管理では、施設の気温上昇を抑制すること、苗の生育を揃えるため均一で適切な水分状態を保つことがポイントです。

気温上昇抑制のためには施設を遮光資材で覆うほか、育苗箱を直管やブロックなどで作ったベンチ等に置き、風通しをよくすることや、周辺に散水することなども有効です。ただし遮光資材は育苗後半や曇天時には、除去して徒長を防ぎます。

かん水は、一時に多量にかん水すると胚軸の徒長を招くので、少量ずつ回数多く行います。

八重鑑別は播種後3～5日の発芽揃い時、子葉展開時、定植直前の3回に分けて行います。